

2020年12月27日 佐土原教会礼拝説教

聖書箇所：ルカ福音書2章22～38節

説教題：祈りの中を歩いて行く

清水町教会のかつての牧師であられた吉間磯吉先生の書かれた「牧会漫談」という本を久しぶりに読み直しているのですが、色々と教えられます。あるページにこんな文章がありました。

「大正14年11月28日(金)午前4時5分起床、4時10分より7時15分迄祈る。気力なく祈禱中、夢幻の中に陥りつつあること数度。11月29日(土)4時35分起床、同40分より8時15分まで祈る。主の愛の故に、サタンとの戦いに死を賭して出て行くべきを示される…11月30日(日)4時17分より7時30分まで祈る。12月1日(月)4時15分起床、8時15分迄、押入れの中で祈る。度々眠る。サタンを打つため目覚めて切に祈る必要を痛感した。自己の靈魂のため、教会のために更に祈れ…」。

祈ることと格闘しておられる様子が伝わって来ました。「サタンは、私達が祈るのを一番怖がる」と聞いたことがあります。今年、皆様はどのような祈りの生活を為さったでしょうか。吉間先生の文章を読むと、私自身、祈りの足りなさを痛感します。悪い者に神様から来る祝福を邪魔させないように、祈ることの大切さを思わされることです。

今朝の箇所は「シメオンの讃歌」として有名な箇所です。初めに記事の背景を確認します。イエス様が生まれてから40日が経った頃でしょうか、ヨセフとマリヤは赤子のイエス様を連れてエルサレムの神殿に詣でました。目的は「マリヤの産後の聖め」のためと「イエスを神に捧げる」ためです。ユダヤの女性は、子供を産んでから40日が過ぎた時、聖めの儀式を行いました。また生まれた子供は、長男は神に捧げるものとされました。でも本当に捧げてしまったら、家に子供がいなくなりますから、通常は長男を捧げる代わりに、5シケルというお金を捧げて、子供を贖った(買い戻した)のです。それが律法の定めでした。それが22～24節です。この部分は交差対句法という書き方がしてあります。22節に「きよめの期間が満ちたとき」とあります。

「聖め」です。その次の「両親は幼子を主にささげるために」は「奉献」です。続く23節は「奉献」の記事、24節は「聖めの犠牲」の記事です。「聖め、奉献、奉献、聖め」という書き方がしてあります。いずれにしても、そのためにヨセフとマリヤ、赤子のイエス様が神殿に行きました。するとそこにシメオンとアンナという老人がいました。アンナは84歳、シメオンも高齢だったと思われまます。そのシメオンがイエスを見て語った言葉が、この箇所の主な内容です。それは私達に何を教えるのでしょうか。結論から言うと、祈りの大切さです。

25節から、「そのとき、エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい、敬虔な人で、イスラエルの慰められることを待ち望んでいた。聖霊が彼の上にとどまっておられた…シメオンは幼子を腕に抱き、神をほめたたえて言った。『主よ。今こそあなたは、あなたのしもべを、みことばどおり、安らかに去らせてくださいます。私の目があなたの御救いを見たからです』(2:25,28～30)。イスラエルは長く外国の支配下で惨めな状態でした。その中で人々は、様々な仕方「神の慰め(救い)」が現れるのを待っていました。その人々の中に全身全霊を打ち込んで「神

が何かを始めて下さる」ことを祈り続ける人々がいました。シメオンやアンナもそのような人でした。シメオンはイエスを見て喜びます。彼はイエス様を見た時、その赤子が神から送られた{主のキリスト(救い主)}であることが分かりました。つまり、神がイスラエルの民に—{あるいは 31 節では「万民(全ての民)」が視野に入っていますが}—いよいよ癒しの業を、救いを始めようとしておられる、そのことが分かったということです。彼はそれを喜んだのです。

しかし、なぜシメオンは、赤子のイエス様を見ただけでそのようなことが分かったのでしょうか。25 節に「聖霊が彼の上にとどまっておられた」(25)とあり、26 節には「聖霊のお告げを受けていた」(26)とあり、さらに 27 節には「御霊に感じて宮に入ると」とあります。何よりも聖霊の示しによることだったのです。しかしなぜ、彼はそれほど御霊に満たされていたのか、神の近くにいたのでしょうか。彼の側の理由もあったのではないのでしょうか。それは、彼が祈っていたということです。「待ち望んでいた」(25)というのは「祈りつつ待っていた」ということです。ある英語の聖書は「祈りに満ちた期待に生きていた」(メッセージ訳 25)と訳しています。

三浦綾子文学館の森下先生の話を知りました。先生が大学の教授の椅子を捨てて文学館の연구원として働き始めた時、彼は「北海道各地で読書会を増やしたい」と思ったのです。札幌の読書会には 5 人しかいなかったそうです。先生は、祈って、祈って、市内の 150 の教会に案内のチラシを送りました。ところが当日、会場に来たのは 1 人でした。先生はショックを受けました。しかし祈っていたからでしょう、神の語り掛けを受けるのです。「読書会は、沢山人が来るのが大切なのか。三浦綾子が懸賞小説に応募するために『氷点』を書いた時、『読まれずに没になることはない。必ず 1 人は読んで下さる。その 1 人のために書かせて頂こう』と書いたのではなかったのか」。先生は「1 人を大切にする」という神の御心を理解したのです。そしてそこから本当の意味で先生の働きが広がって行くのです。

シメオンも、イスラエルが慰められること、救われることを祈っていました。何年も、何年も祈ったのです。「神の慰めは、救いはどこにあるのか」と言いたいような辛い日々の中で祈った、祈りつつ待ったのです。それは、どんなに人間的な知恵があっても、制度が整っても、繁栄しているように見えても、神が関わって下さらなければ、神の救いが来なければ、本当の祝福は来ない、全ては虚しいからです。以前、「クリスマス休戦」の話をしました。神が関わって下さるなら、戦場の真ただ中で和解が起こるのです。私達の教会でも、クリスマス祝会の直前にプロジェクターが壊れて、私は大慌てをしたことがありました。しかし、神が関わって下さるなら祝福の集会が出来ることを経験しました。神が関わって下さるかどうか、それが全てだと思います。彼はそれを分かっていたから祈ったのです。祈って、祈って、神の救いを待ち望み、祈りの中で神様に近づいたのです。だから赤子のイエス様の中に—{イエス様は何も語らない、何もしない。しかし神様は独り子を人の世に、人の子として生まれさせたのです。この何もしない、何も語らない幼子イエスの存在そのものの中に、神様の人間に(私達に)対する憐れみ、私達を救うという熱い、揺るがない意志が現れていた、その}—神の救いの思いをシメオンは見る事が出来たのです。さらにシメオンは、イエス様の受難、イエス様の受難の故のマリヤの苦しみ、そこまで見

せられているのです。いずれにしても、その意味でこの箇所は、祈ることの大切さを語るのではないのでしょうか。アンナもそうです。彼女は84歳の今日まで、神殿で「祈り…に明け暮れ」(リビングバイブル 2:37)で、過ごしていたのです。だからイエス様のことが分かり、喜ぶことが出来たのです。祈ることによって私達は、自分で気づこうが気づくまいが、神に近づくのです。祈りに生きたこの2人こそが、最初のクリスマスに救い主の誕生を理解して喜ぶことが出来た人達なのです。

神学者ヘンリ・ナーウエンは言いました。「どんなにキリスト教的な言葉を語っていても、キリスト教的な行いをしているように見えていても、祈っていない人がいる。祈らなかつたら全てが空しい。それは信じていることにならない…信仰とは祈りである」。「祈りを通してどのように神と交わっているか」、それが問われるのです。

ただ、ここでもう一步踏み込んで考えたいのは、祈りの内容です。シメオンは、イスラエルの慰められることを祈っていました。つまり—(自分のことだけでない)—同胞のために祈っていた、同胞のために祈ることを生きることにしていたのです。アンナもそうです。おそらく23~24歳でやもめになって、60年間、女1人で生きて来たのです。当時、それは大変なことだったと思います。女性には仕事などないのです。しかし彼女の関心は、自分のことに始終していません。同胞の上に神の贖いの出来事を待ち望んだのです。そのことは私達に対するチャレンジです。私は、どれだけ心を砕いて執り成しの祈りをしているか、それが問われます。「世の光」の放送を通して多くの人々に福音を語り伝えられた羽鳥明先生も、祈りの人だったようです。ある人がこう言いました。「羽鳥先生が『祈っていますよ』という時は、社交辞令でなく、本当に祈っておられた。私も、自分がもう解決して忘れてしまった出来事を、随分後になって『東さん、お祈りしていたあの件はどうになりましたか』と先生から尋ねられて、驚嘆し、恐縮したことがありました」。「世の光」の働きを受け継いだ村上先生が羽鳥先生の病床を訪ねた時、羽鳥先生はベッドから降りて、床に跪いて「どうか日本にリバイバルを与えて下さい、日本を憐れんで下さい」と泣きじゃくりながら祈られたそうです。「現代のシメオン」という感じです。

私達の信仰生活もそうではないのでしょうか。「愛は祈りから始まる」という言葉があります。私達は愛することを大事に考えます。それが人間関係の祝福の原則だと信じます。でも信仰者が「愛する」という時、それは、まず祈ることから整えられて行くのではないのでしょうか。聖書に「ある人々が中風の人をイエスのいらっしゃる家に運び、群衆で中に入れないので、外から屋根に上り、屋根をはがして中風の人をイエス様の前につり降ろした」という記事があります。その祈りに答えて、イエス様が中風の人に業を為さるのです。シメオンも、悲しむ人、苦しむ人々を祈りの中で神の許に運んだのです。その祈りに神が応えて下さったのです。もちろん私達は自分のことも祈ります。その祈りは切実です。ある神学者は「最大の罪は祈らないことだ」と言いました。自分のことも熱心に祈りましょう。でも「祈るということの大切な一面は、誰かのために執り成すことではないか」ということも教えられるのです。先週のメッセージの中で「私は急性鬱症で入院中に、神に出会い直す経験をさせて頂いた」と申し上げました。私は落ち込むばかり

で何もしていないのです。祈って頂いていたからだ、心底思います。今も祈って頂ける幸いを感じています。私達には、自分では祈る力もないということがあります。でも誰かに祈ってもらっている、神の祝福を取り次いでもらっている、それは本当に感謝なことです。教会の交わりは一見淡泊です。しかし、毎日の祈りの中で教会の仲間を覚えて祈る、あるいは、そのご家族の必要を覚えて祈る、祈りの中で誰かを神様の許に運ぶ、神の祝福を執り成す、そこにこそ、教会の交わりの意味はあるのではないのでしょうか。

そのように祈りに生きた結果、シメオンは言いました。「主よ。今こそあなたは、あなたのしもべを、みことばどおり、安らかに去らせてくださいます」(29)。シメオンは、祈りに励んで来たからこそ、祈りの生活がいよいよゴールにたどり着いた、目的を果たしたという満足感で満たされたのではないのでしょうか。ある牧師が言いました。「祈りの中に年老いて行く、それが信仰者の姿だ」。祈りに生きるということ、そこに人生を満たされたものとして仕上げる秘訣があるのではないのでしょうか。

新しい年が始まります。新しい年、祝福もあるでしょう。でも闘いもあるかも知れません。がっかりすることがあるかも知れません。しかし「詩篇」の作者は歌いました。「わがたましいよ。なぜ、おまえはうなだれているのか…神を待ち望め…」(詩篇 42:5)。祈って神の御業を待ち望みましょう。神から来る希望と恵みに生きて行く1年にしたいと願います。